

「戦争は二度と起こしてはいけない 子供心に誓う」

中岡 正次 （83歳）

私は父の仕事の関係で1944年10月に大阪の阿倍野区から西成区に移り住みました。当時私は国民学校4年生で、馬力運搬業の馬の管理に雇われていました。年が明けて45年になると真夜中に警戒警報が鳴り、夜もおちおちと寝られない日が続くようになりました。

東京大空襲が3月10日にあり、大都市の名古屋・福岡と次は大阪と予測がついていたのか、12日の昼間に、近くの空き地におしろやゴザを引いて一軒1坪ぐらいの面積で家財道具など布団や毛布を積みあげて出した。さて、真夜中が来て空襲警報が鳴り響き、表に出ると、真向いの畑をはさんで工業用の油脂を製造する会社が真っ赤な炎をあげ燃え盛っている。その炎はその後1ヶ月間昼夜消えなかった。灯火管制の引かれている時代にですよ。

父と隣りの小父さんは落ちてくる焼夷弾を拾い上げては防火用水で消化する。私たちは母親が1歳の赤子を背負い、5歳の妹と逃げ回ったが、行くところ行くところで火災に出会い、結局はぐるっと熱い目と怖い目をしながら家に舞い戻った。馬舎には12～3頭の馬がいて、自分が使っている馬の避難に5～6人の馬子さんが連れ出してくれた。翌日空き地に出した家財道具を取りに行ったら、

みんな三方の熱気で灰になっていた。学校に様子を見に行ったが、コンクリートの 3 階建の校舎でしたが、半分は崩壊していて下から見上げて私の教室は助かったと喜びいさんで駆け上がったが、防火シャッターが降りていて、教室と共に私の教科書も全て焼き落ちていた。講堂には焼死体が所せましと並べられていた。

米軍は輸送機関である天王寺駅・大阪駅・造兵廠のあった森ノ宮駅・京橋駅・国鉄関西線の今宮駅には 1 トン爆弾も数発落とされ浪速区は全焼した。その今宮駅のそばを父が通りがかった時、帰ってこなかった馬が鳴いて知らせた。4 月半ばのことです。馬子さんは焼夷弾が直接当たったのか行方知らずのままです。堺の大空襲の時もひどかったです。死者がトラックで運ばれてきて、次から次へと山が連なるように築かれていく死屍臭が蔓延していて、生き地獄にいるように感じた。

戦争は二度と起こしてはいけないと子供心に植え付けられたのが、平和を守る取り組みを続けている一つの動機です。